

NPO「命のバトン」代表の経験舞台化

救命の大切さ

「一人語り」

高校生の娘を亡くした経験から、NPO法人を立ち上げて自動体外式除細動器(AED)の普及などに取り組む福井市の女性らの活動が「一人語り」として舞台化され、二十五、二十六の両日、福井市内の三会場で上演される。関係者は一分一秒を争う心肺蘇生に対する意識を高め、一人でも多くの救命につながればと願っている。(坂本碧)

上演するのは防火や防災への意識啓発に取り組み「防災一人語り」推進グループ(東京都)。「一人語り」は、複数の登場人物がいる脚本を一人で朗読し、楽器の生演奏も交えて上演する。全国各地の火災や災害に関する実話などを脚本化して、これまで全国で六十公演以上を行っている。県内公演は二〇一六年秋以来三年ぶりで、今回初めて

25、26日 福井で上演



一人語り「命のバトン」に出演する岩田瞳さんと中島健太さん(東京都新宿区)

娘亡くした母の心情描写

英語版の上演もある。作品名は「命のバトン」。NPO法人「命のバトン」代表の川崎真弓さんの経験をもとに脚本化し、今年二月に東京都内で初演した。川崎さんの当時十六歳だった娘は、体育祭のリレーの最中に倒れて数日後に亡くなった。川崎さんは、AEDを使っていれば救えたかもしれないと、同法人を立ち上げてAEDや心肺蘇生法(CPR)の普及に取り組んでいる。

脚本ではそうした取り組みとともに「生きたかったのに、生きられなかった沙織の命を抱きしめて、AEDの普及活動を始めた」「『あなたの命は、大切なんだよ』と伝えたいと思うようになりました」などと母親の心情を描写。同グループ代表の加藤雅さん(六五)は「AEDやCPRに興味を持ってもらいたい。命の大切さも伝われば」と願う。

入場は無料で公演は各約三十分。歌手の岩田瞳さんが、クラリネット奏者の中島健太さんの演奏に乗せて語る。英語での上演は二十六日の日本語版の後に行われ、NHKラジオの「基礎英語3」に出演するレミ・ダンカンさんが語る。二十五日の福井市防災センターでは、公演の後に川崎さんらによるパネルディスカッションなどもある。

◇日程と定員、問い合わせ先(いずれも事前の申し込みが必要)

【25日】▽福井市防災センターで午後2時半開演。定員150人。嶺北地方在住または在勤者が対象。◎福井市防災センター(0776)(20)5156▽福井市順化2丁目の寄合カフェ京町Y・Yで午後6時開演。定員20人。◎京町Y・Y清水さん(0776)(22)1671

【26日】▽フェニックス・プラザ4階集会室で午後2時開演。定員50人。◎NPO法人「命のバトン」=info@heartlife-fukui.com